

## 日本美術の研究について

澤村專太郎

或國、或民族の美術史を研究するには、彼等の美術が發展し又墮落するに際し、常に其背景となれる文明自體を充分に理解する必要がある。此事は美術史のみには限らず文學や音樂を初めとし、廣く藝術全般の歴史を研究する上には、最も必要な事の一である。之が明かにせられなければ、藝術の眞の精神を汲み分けることが出來ない。例へば文學の歴史を研究することについて考へて見れば、文學史家の中に是單に作物の筋書、作家の傳記の類を羅列することのみ能事とする人も少くない様である。勿論是等の研究も必要でないとは云へないが、嚴肅な意味に於ける文學史の研究は、決してかやうな種類のものを以て満足する事が出來ないのである。即ち文學の背景となつて居る所の其民族其時代の文明の精神を討ね、之を脚地として作物に對し銳利な觀察を向けて

て行かねばならぬ。又そうしてこそ初めて其作物の眞の精神が闡明せらるゝのである。美術史の研究も之と同様である。即ち日本美術史の研究についても、先づ日本文化史の研究といふ事が最も必要なことの一である。然るに我國に於ける文化史研究の程度は未だ甚だ不充分であることを免れない。其故に此方面に於て先づ我美術史研究家は大なる困難を見出す譯となるのだが、此困難は現時に於ては、遽かに如何とも爲難いことであるから、唯これは美術史の研究的態度を決定する上に大切なこととして考へておく必要があると云ふに止めねばならぬ。

次に美術史研究に於て他種の藝術史に對する關係を切實に考へてゆくことの必要を忘れてはならない。即ち或時代の繪畫、彫刻、建築に對して其時代の文學、音樂等の關係を充分に理解することが必要である。これは啻に美術史の方面からも必要であるのみならず、文學又は音樂の方面からも必要である。唯美術の方面にばかり注意をむけて居ては説明に困難なる史上的出來事が、他種の藝術に眼を轉ずることによつて、甚だ明白な説明をうることもあり、又

美術の方面のみの考察に耽つて居ては、極めて些細な出來事であるかの様に思はれる事實も、同時代の他種の藝術について考察するに及んで、それが却つて頗る重要な出來事であることが見出さるゝ場合が少くはない。例へば浮世繪が近世初期に方つて蔚興してゐるが、之についても一方では當時歌舞伎の如き平民的な舞踊が盛行したことゝ關係せしめて考へれば、浮世繪の精神が極めてよく理解せらるゝのである。

凡て美術に限らず藝術の外に於ても歴史的研究には批評的精神が甚だ大切である。吾々の前に暴露せられ、又は残されてゐる事實のみが、必しも事物の全真相ではない。故に歴史的事實の真相を捕へやうとするには、批評的精神は最も缺くべからざるものである。此意味に於て歴史家には批評的精神が甚だ大切なものである。けれども美術史の研究には殊に批評的精神が必要である。もし少しく誇張した語で云へば、美術史といふものは最も嚴肅な意味に於て『批評の歴史』といはれ得る。此性質を缺く時は美術史は生命あるものとはなり得ずして冷灰の如きもの

となるのである。

日本美術の研究には種々の方法があり得べきであるが、畢竟するにそれは二個の方面よりなさるべき事に歸著する。

第一は製作物の研究である。是は建築、彫刻、繪畫の古き作品について研究する事であつて、建築ならば古い建築の遺物を考察比較するのである。此方は更に二つに分つて考へることが出来る。

其中の一は即ち親しく實物について研究することである。換言すれば法隆寺の如き寺院ならば、其所在地を尋ね、又繪畫ならば、畫幅の實物について研究するのである。然るに實物研究には種々の困難と不便とを伴ふものであるから、之を救ふ爲に必ず他の方法が案出せられなければならぬわけである。是に於て他の一なる複製品を以てする事の必要が生じて來るのである。彼の繪卷物の模本によつてするのも此方法である。此法は美術品製作の進歩と相待つて現今では甚だ容易に行はれ得る様になつた。此方面に於て参考とすべきものは甚だ多いのである。其二三を擧げると、先づ東瀛珠光。眞美大觀。文様集成。

建築工藝鑑。法隆寺大鏡。國寶帖。國華等の如き多様なる作品から成立つもの。それから和漢名畫選。南畫集。圓山四條畫鑑。浮世繪派畫集等の如き畫集類。及び雪舟山水畫卷。傳鳥羽僧正筆戲獸畫卷。華山蟲魚帖。歌舞伎草紙の如き、單獨なる作品を複製せるもの等、數へ來れば其數は甚だ多いのである。此外なほ家集ともいふべきものがある。之は個人の藏品を集めたもので、例へば立庵鑑賞(村山家)。世外庵鑑賞(井上侯爵家)。長春閣鑑賞(川崎家)等の如きは即ちそれである。これ等の複製品の外、古來傳つて居る所の模寫類がある。これは實物が已に散亡して居て僅かに模寫のみの傳へられたものもあるが、これなどは今や殆んど實物と同様に尊い材料である。繪卷物の類に於ては特にこの模本類の傳へられたものが多いから研究家に好都合である。

次に研究の第二の方面は記載方向よりする研究である。此方面に於ける上代の古い記録は佛寺の關係あるものが多い。其中で殊に寺社の古い縁起及財産目錄の類が参考となる。例へば大安寺伽藍緣起並流記資財帳。法隆寺伽藍緣起流記資財帳。西大寺資財流

記帳。東大寺獻物帳等の如きは即ちそれである。これら等は何れも或意味に於て古い美術品の目録であるから、研究上現今からは大に参考とすべきものがある。此種類のものが隨分多量にある。徳川時代の末に表れた寺社實物展閱目録の如きも此種類の一種のものとして數ふべきである。又足利時代以後殊に徳川期に至つては所謂名物器玩を記載した名物記類が表はれてゐるが、これ亦此種の目録的のものとして参考に資すべきである。

次に佛教美術に關係しては、阿婆搏抄。覺禪抄。圖像抄等は密敎美術の研究に最も必要なものである。また作者の傳記を研究するに参考すべきは、淺岡興禱著古畫備考。堀直格編扶桑名畫傳。狩野永納著本朝畫史。菊本嘉保著萬寶余抄。新井白石著畫工便覽。檜山義信著皇朝名畫拾彙。齊藤彦五郎著圖畫考。白井華陽著畫乘要錄。清宮秀堅著雲煙略傳。山谷傳編浮世繪類考。無昂老人著近世逸人畫史。古筆了仲著扶桑畫人傳。堀直格著大和繪顯文抄。黑川春村稿歷代大佛師譜。瓊浦畫工傳。西村兼文著畫人傳補遺等は何れも著名なるものである。次に作家傳

記よりも作物の目錄性質に近い記載として藤井貞幹著考古抄錄。同上考古日錄。黒川真頼編考古畫譜。源元幹輯圖畫一覽等がある。此外参考とすべき書としては、黒川博士全集美術工藝部。帝國美術略史稿本。藤岡博士近世繪畫史。横井博士日本繪畫史。國寶帳解說。高山博士日本美術史稿。平子尙著佛教美術の如き、及國華を初めとし前述の複製品について挙げた諸美術書の解説若くは本文等も参考とすべきである。尙美術研究家の紀行及地理書類も参考となるべきものが少くない。例へば屋代弘覽著道の幸。得能良介著巡廻日記。黒川道祐選雍州府誌。林宗甫選和州舊蹟幽光を初めとし、多くの名所記類も、或點に於て参考すべきものである。尙又文晁畫談、近世名家書畫談、山中人饒舌等美術に關する談叢、評論類も甚だ多くあるが、これ等も亦研究上一瞥を拂はねばならぬ。(大正三、一〇、一一筆記)